

5 国際シンポジウム・ワークショップ**「人間科学と平和教育～体験的心理学を基盤とした歴史・平和教育プログラム開発の視点から」を開催して
～HWHのこれから**村本邦子
(立命館大学)

シンポジウム報告の部分で紹介したように、HWHと出会った2007年より東アジアにおける平和教育プログラム開発に取り組んできた。今回のシンポジウムでは、この「平和教育プログラム」という名称を使ったが、もともとは「戦争加害によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み」、次に「歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み」と銘打っていた。それ以前は、村川治彦が「からだところで歴史を考える」と呼んでいたものである。これはセラピーなのか、教育なのか、運動なのか、研究なのか、これをどのような切り口で展開していくのが良いのかということは、私自身、最初から一貫して悩んできたことであり、今回のシンポジウムの大きなテーマのひとつだった。ここで明らかになってきたことを整理しておきたい。

セラピーとしてのHWH

アルマンド・ボルカスは、これを、“Healing the Wounds of History”「歴史の傷を癒す」と名づけている。日常的にトラウマの臨床を行っているボルカスや私にとっては、実践のなかで歴史の顕在的・潜在的トラウマを実感しているがゆえに、トラウマの修復というセラピューティックな側面にどうしても眼が向くし、それ抜きに社会変革はあり得ないと考えるからこそ、これをボトムアップと感ずるものである。とは言え、試行錯誤のなかで、いくらかの検討すべき課題を確認してきた。

もともとHWHはホロコースト・サバイバー二世であるボルカス自身のトラウマ修復の試みから生まれたものである。彼は、アメリカに移住したホロコースト・サバイバー二世として、まず、同じ立場にあった被害者の子孫たちと自助

グループを展開するが、十年ほどしたところで、次の段階へ進むためには加害者側の子孫たちと出会う必要があると感じ、カリフォルニアに住むドイツ人に呼びかけて HWH の前身となるグループを試行することになった。結果的に、双方が抱えていたトラウマが解放され、和解へのステップを踏み始めたことを実感し、以後、この手法を発展させていくことになる。被害側と加害側が一緒にワークすることでトラウマの修復を目指すというグループセラピーは、他に類を見ない画期的なものである。

これを東アジアの文脈に応用しようとしてきた村川、笠井、村本の三人も、当事者性を持つ自分自身の問題としてこれに取り組んできた。ところが、ボルカスが被害側にあるのに対して、私たちは加害側にあるため、ボルカスとは異なる葛藤を抱えることになった（もっとも、ここで言う「私たち」とは、私自身の主観であって、完全に三者を代表しているわけではない）。本来、HWH は、被害者・加害者という二項対立を越えることを目指すものであるから、理論的には立場にこだわらざる必然性はないことになるが、それにしても加害側から「二項対立を越えよう、和解しよう」と呼びかけることは難しい。もっと言えば、私は、「構成主義的国民観」に立ちながら「日本人としての責任」を認め、引き受ける立場に立つので（村本、2011）、最初から加害・被害をうやむやにすることをよしとしない。ボルカスは、謝罪のプロセスを、破壊、謝罪の必要性、承認、責任を取る、謝罪、許し、修復、約束という 8 つの段階で捉えているが、和解は目的ではなく、プロセスを経た結果というべきだろう。

その一方、私たちは被害者としてのトラウマを抱えてもいる。加害者に関する臨床心理学的観点から言えば、被害者としてのトラウマのワークスルーなしに加害者としての責任に向き合うことは不可能である。しかし、実際、加害側の立場で被害側と向き合う時に、あまりに被害者の側面を強調して表現することには躊躇がある。おそらく、被害側も、私たちへの遠慮や気遣いから十分に表現できないものがあるだろう。ボルカスらも、被害側の自助グループを経て、加害側と向き合うというステップに進んでいる。葛藤するふたつのグループが向き合う前に、ある程度の準備性が必要かもしれない。

しかし、三世代目になると、こういった感覚も違ってくるのかもしれない。正確に言えば、私たちは 2.5 世代くらいになるが（つまり、戦時中、親たちは

まだ子どもだった)、2007年、初めて南京へ行った時、純粋な二世(親たちが直接戦争に関わっていた世代)の感覚には違和感を覚えたものである。たとえば、追悼式において、「記念碑に向かって皆で土下座をしよう」という提案に対して、私たちは「各々が自分の気持ちに合った形で謝罪の気持ちを表現すべきではないか」と反対して、受け入れてもらった経過がある。しかし、この純粋な二世の謝罪の形は、中国側には大きなインパクトを与えたようだった。

もっとも、二世、三世というカテゴリー自体が虚構とも言えるし、同じ三世であっても、個人的なルーツと戦争加害との距離感はさまざまである。非常に強く加害者とアイデンティファイせざるを得ない立場にある三世のHWH参加者は、強い罪悪感と直接的な痛みを抱えているが、これはどちらかと言えば稀有な例かもしれない。

また、私たちのグループには在日外国人を含んできたが、彼女たちは、日本側とも中国側とも言えない自分たちの立場をどこに置くかで揺れていたし、当然のことではあるが、中国に対してだけでなく、自分たちの国にも謝罪すべきではないかという気持ちを強くしたのではないかと思う。HWHの中国側の参加者に台湾や香港の出身者を含むとき、同様に、ねじれた別の次元の問題を垣間見た。また、このたび、南京出身の中国人から、「このグループに参加しているのは、南京の大学に通っていると言っても、純粋に南京出身の中国人ではない。南京出身者は、これ以上、南京のラベルで自分たちを見られたくはないのだ。」という痛烈な批判を受けた。これは、ナムムの家でも感じたことだったが、特定の被害がシンボル化されることで被害のもっとも中核にいる人たちを非人間化するという罪を犯す可能性がある。

HWHのワークのなかで、中国の参加者たちは、「あなたたちを許しますと言いたいが、犠牲者に代わって自分たちに許す権利があるのかわかりません」と言った。私自身、原爆記念日にアメリカ人から眼に涙を浮かべて、「アメリカ政府に代わってあなた方に謝罪したい」と言われ、大いに戸惑った記憶がある。これは、被害と自分の間に距離感があるゆえの反応だろう。一般的に言って、コミュニティレベルのトラウマについて語る時、被害との距離感の個別性を無視することになる。

ここまで書いてきたことは、小田が問題提起した三つの仮説、すなわち、「ト

ラウマ」仮説、「国民」仮説、「世代間連鎖」仮説への疑問を実践から裏付けるものである。自分自身がトラウマの臨床に関わりながら、社会の心理主義化やトラウマブームにうんざりし、その弊害を強く感じて、繰り返し、繰り返し、何とかトラウマモデルを超えることはできないものかと考え続けてきたが、トラウマモデルによって、初めて見えてくるもの、扱えることがあることを今のところ否定することができない。ある意味で、トラウマ、国民、世代間連鎖という概念をいったん構築することで、セラピーが可能になるのだと思う。そして、いったん構築されたものは、いずれ脱構築されることになる。スピヴァク(1998)の「戦略的本質主義」という概念が役立つかもしれない。

そもそも、目に見えない抽象的なものを扱うことは不可能に近い。これを、身体、ドラマ、アートといった形あるものとして取り扱うことで、変容が可能になる。しかも、私たちが扱っているのは「歴史のトラウマ」であり、個人臨床を超えたコミュニティワークや社会変革を目指そうとしている。ある意味で、これは「セラピーというドラマを使ったパフォーマンス」と言えるのかもしれない。

最後に、これをセラピーと位置づけたとき、誰がファシリテーターとなるのかという問題が出てくる。これまでのところ、HWHはアルマンドという個人と切り離せないものだった。村川、笠井、村本は、コ・ファシリテーターの形で、いくらかHWHの進行に関わってはきたが、しかし、これでは、あまりにできることが限定される。そこで、HWH参加者を中心にHWHファシリテーター養成をしていこうと、今回、国際シンポジウムの後に、3日間のワークショップを2段階に分けて開催した。そのなかのごく一部ではあるが、本記録第II部に紹介されている。現在は、HWHのテクニックを自由に使えるようになることを目指し、互いのプロセスをファシリテートし合う研究会を続けている。

教育としてのHWH

本来、セラピーは、高い動機のある個人が、基本的には有料で申し込みを行って始まるものであるが、私たちの試みは、大学を舞台に展開してきたためもあるが教育的な側面が強調されてきた。参加は無料であり、強制はしないが、推奨という形での方向づけがあった。また、試行的なプログラムであることか

ら、研究的な側面を含むため、できる限り、グループ提供者と被提供者という境界線をなくし、ともに作り、ともに考えるというスタンスを維持してきた。

これを広めていくためには、特殊な問題意識を持つ人々のためのセラピーとしてではなく、もっと基本的な教育として構成していく方が望ましいし、現実的であろう。とくに、平和教育に力を入れ、国際平和ミュージアムを持つ立命館大学のプログラムとしてHWHを展開させることの意義は大きい。今回のシンポジウムのなかで、国際平和ミュージアム副館長の加國尚志氏から、二次受傷やヘイトを生まない暴力の展示や学習法についての問題意識が共有された。私たちのグループにおいても、これまで、子どもたちに対する戦争教育のあり方が子どもたちに恐怖を与えてきたところから、逆にタブー視につながっているのではないか、広島や沖縄の語り部たちは、自らを犠牲にして語ることで、トラウマの再体験をしている可能性があるのではないかという問題意識があった。今後、ともに取り組んでいきたい課題である。

HWHを教育として位置づけようとするなら、これをファシリテートするのは、セラピストでなく、教師、教員、あるいは学芸員や平和ボランティアということになるだろう。ドイツを見ても、平和構築に貢献してきたのは、心理学ではなく教育、とくに歴史教育の分野である。この領域における研究法の開発と指導者の育成が鍵になってくる。

ドイツに、ナチス加害の罪を認め、50年以上にわたって、贖罪のために平和奉仕活動を続けてきたASF（行動と償いのしるし）というNGOがあるが、ここでの取り組み例には学ぶべきものが多くある。ASFは、かつて被害を与えたヨーロッパ諸国に若者を中心とした長期ボランティアを派遣し、ホロコースト・サバイバーやその子孫をサポートし、記念所でガイドをし、障害者、高齢者、不利益を抱えるもの、避難民の世話をし、コミュニティプロジェクトに参加して反レイシズムのために尽くしている。こういった償いのしるしとしての行動と交流自体が、平和を創る土台になる。

このボランティアの教育としてどんなことをしているのか、1999年からASFの事務局長を務め、活動全体をまとめていた事務局長であるクリスチャン・シュタッフア氏にインタビューをしたことがある。彼は、宗教学を学んだあと、戦争犯罪やナチスの影響に関する研究所を設立し、家族の歴史をたどりながら教

育する方法を試みてきた。個人的な経験や環境は、政治的な活動に直接つながるといふ理論を持ち、「ユダヤ人でないドイツ人とユダヤ人」が交流するグループでは、参加者それぞれ自分の家族の写真を持ってきて、初めに自分の家族の歴史を語りあう。主として第三世代だが、興味深いのは、ユダヤ人は自分の家族の歴史について詳しい知識を持ち、痛みをもって語るのに対し、ドイツ人は知識も問題意識もひどく貧弱だった。たとえば、歴史を学ぶ大学院生が、表紙にSSマークのついている祖父のアルバムを持ってきた。SSの中でも高い地位にあった人で、アルバムの中には、戦時中に行った犯罪の写真も含まれていたが、彼女は、「このアルバムがどういう意味を持っているのか理解できない」と発言したという。将来、彼女は歴史学者になるかもしれないが、自分の家族の歴史についての無理解は、彼女の歴史観に影響を与えるだろう。

シュタッフア氏は、こういった理論と経験に基づき、ASFのボランティア研修でも、自分の家族の歴史について考えるプログラムを取り入れているが、これについては、組織内で議論があり、自分の家族の歴史をたどることは、心理的痛みとつながるので、コントロールできないことが起こるのではないかと反対する声もあったという。反対の人が無理にやっても意味がないので、やりたくなければやらなくてもいいということになっている。しかし、シュタッフア氏の経験では、教育的なプログラムの範囲では、参加者は自分が話したいこと、自分が耐えられる範囲しか話さないで、怖れるようなことは起きないということだった。

歴史のトラウマが文化に普遍的な問題であるのならば、むしろ病理モデルを脱し、これを文化の再構築と捉えて、教育を考えるのは合理的かもしれない。加國氏は、「暴力からの人間存在の回復」と表現し、中村正氏は、「脱暴力にむかう知識や実践を教養に」と言った。今後の私たちのステップとしては、教育場面やミュージアムで使用しやすい技法を特定し、場面設定によって何らかのフォーマットを作り、現場の人たちとともに試行錯誤を繰り返していくことだろう。

運動としてのHWH

HWHの最終ステップは「社会的奉仕や創造的活動への変換」であり、個々

人の変容だけでなく、社会変革を目指している。これは、ジュディス・ハーマン（1995）によるトラウマからの回復モデルの最終段階に含まれている「生存者使命」に関わるものであり、メアリー・ハーベイ（1999）によるトラウマからの多次元回復モデルにある「意味づけ」という次元に含まれるものである。このような意味で、HWH は、問題意識を持つ者たちの当事者運動でもあるとも言える。

この側面を考えると、女性解放運動がたどってきた足跡に学ぶものがあるだろう。1960年代後半に沸き起こった第二波フェミニズム運動において、大きな役割を果たしたツールのひとつに CR グループ（Consciousness Raising：意識覚醒もしくは意識向上と訳される）がある。これは、“The personal is political.”（「個人的なことは政治的である」）を合言葉に、少人数の女性たちが定期的に集まって、女性として生きてきた自分たちの体験を語り、共有しあうグループだが、個々の女性の問題だったものを普遍化し、それらが家父長制や男性中心主義から生じていたことに気づくことに最終目標があった。この活動によって、それまでひとりひとりの女性が胸に秘めてきた子ども時代の虐待やインセスト、夫からの暴力やレイプ、その他の問題が、決して個人的な問題ではなく、社会的・政治的な問題であることが明らかにされたのである。

その結果、草の根運動に支えられたさまざまな種類のホットライン、シェルターなど、女性たちの救援組織が次々と立ち上がり、法律の改善を求めるアドボカシー（権利擁護活動）も盛んに行われるようになった。他方で、CR グループのセラピューティックな側面へのニーズも高まり、権威主義をなくすためにリーダーを置かないグループだったものから、ファシリテーターを養成する方向性が生まれると同時に、CR でテーマ化した虐待、性暴力、DV などの自助グループやサポートグループ、セラピーグループが発達する方向性が生まれたのである。

同様の流れは日本においても見られ、1990年代はじめ頃から、女性センター等で CR ファシリテーター養成が行われたり、各種自助グループが立ちあがりたりした。こうして立ち上がった女性たちの自助グループは、その後、社会変革を優先するグループと、自分たちの癒しを優先するグループとに分かれていった印象がある。これらの方向性は本来、一致するのが理想であろうが、何を優

先するのか、つねに葛藤をはらむものである。

あらためてHWHの歩みを振り返ると、私たちがプロセスのなかで経験してきたことは、それまで個人や家族のレベルの問題だと思っていたものが、実は、歴史的・社会的問題と密接に関わっており、やはり、“The personal is political.”（「個人的なことは政治的である」）ということであった。そこから見えてきたものを社会の問題として再構築し、提起していくことができる。

女性解放運動は、学問分野においては女性学という形をとった。すでに専門教育を受けている女性たちがこの運動に加わった流れと、運動の中からより専門的な必要性に迫られて専門教育への門をくぐった流れがあったが、いずれにしても、多様な課題を内包しつつも、学問化させたことの意味は一定程度確認できる。小田が提起したように、HWHを単なる運動に留めるのではなく、運動が陥るおそれのある偏りを研究の視点から是正して、より現実に適応したものにしていくことは重要であろう。幸い、私たちのプロジェクトは、今や国境を越え、学問領域を越えた多様な人々から成り立っている。今回の国際シンポジウムは、平和構築を目指すこの新しい取り組みを人間科学という科学的な枠組みで捉え直す貴重な機会であった。

研究としてのHWH

私たちの取り組みを新たな平和教育の試みとして「人間科学」という枠組みのなかに置いてみると、歴史をどう捉えるのか、個別の物語を歴史にどのように関連づけていけるのかといった課題が浮かび上がる。歴史学の立場にある張連紅は、歴史問題が現実の問題として日中関係の発展にとって大きな障害となっており、それを乗り越えるために学術研究が必要であるとしている。他方、金丸裕一は、これまで歴史学は理性を過信しすぎてきたのではないかと、日常世界において、教育よりも「伝承」や「物語」を通じて歴史を「学ぶ」人々を侮り過ぎていたのではなかったのかとの反省から、「臨床歴史学」を構想する。

村川は、個の体験を重視する体験的心理学の基本的立場を明確にすることで、客観性、実証性を重視する歴史学や社会学にこうした個人の体験をどのようにつなげていくかについての展望を開いておく必要があるとし、小田は、それぞれの参加者が、自らの物語を、そして他の参加者との関わりを、そしてその結

果浮びあがってきた国境や世代を越えた物語を語り、互いに関わりあいながら、つむぎ出されていく平和が「縁起」していく様を、ポリフォニック（多声的）に編み上げ、「物語のタペストリー」として提示するような研究法を提起した。

私自身、今回のシンポジウムで、さまざまな背景を持つたくさんの人々が交流してきたところにこのプロジェクトが存在しているということへの言及で始め、紫金草合唱団の方たちとの新しい出会い、お一人お一人の歌声と顔に、それぞれの背景にある人生の物語を思いながら胸が熱くなった。余談ながら、シンポジウムを終え、紫金草を日本に持ち帰った山口誠太郎氏が初代校長を務め、紫金草を校花とする星薬科大学の創設者である星一への関心から、その人生を調べてみた。激動の時代を社会事業家として生き抜いた星一の個人史の向こうに見えてくる歴史はまた新たな次元を開き、たいへん興味深い体験となった。

歴史が自分の個人史と結びつかないドイツの歴史学者の卵の例に触れたが、本来は個人史を束ねたものが社会的歴史を紡ぎ出すはずである。金丸（2011）は、歴史学者の信じる「客観性」が、実は、無数に発生した出来事を記録している膨大な史料群の中からどれを選択するかによって、完成する歴史像には大きな相違が発生してしまうこと、史料をきちんと運用して改竄もせずに、自らが意図する結論を導出することもまた可能であると指摘している。記憶とは主観的なものであり、歴史は構築されるものである。しかしながら、歴史の共有がない限り、人々は同一地平にある世界に住むことはできない。個別の歴史を包含し得る共通の歴史をいかに構築していけるのか。

村川（2011）は、過去の歴史と今の自分のつながりを実感できないこと自体が、日本社会の中で育まれた自分の「社会的身体」であり、過去と切り離されて今を生きていると感じている自分の社会的身体を「脱歴史的身体」と呼ぶ。そうした「脱歴史的身体」から脱却し、自分を育ててきた過去を自分のものとして実感し、近隣の人々とより深いところをつなげるためには、自分の中に沸きあがってくる感情に正直に向きあい、他者や自分自身の感情をしっかりと受け止める「歴史的な身体」を育むことが必要であり、その歴史を自らの生と繋がった現実の延長として捉えることができる「社会的身体」を育む歴史教育こそが、歴史を記憶しそこから学ぶための基盤となるべきだとしている。

張も、これまでのような歴史学の理性による対話だけでなく、心理学をはじ

めとする多方面の科学を動員した新しいモデルが可能なのではないかとした。現在進行形の平和構築の試みがポリフォニックな新しい歴史を構築していくことに成功するならば、おのずと過去の歴史も違って見えてくるのかもしれない。

【引用文献】

- 金丸裕一 2011 「戦争史研究の諸問題」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み～南京を思い起こす 2011』立命館大学人間科学研究所
- ジュディス・ハーマン 1995 「トラウマと回復」中井久夫訳 みすず書房
- メアリー・ハーベイ 1999 「生態学的視点から見たトラウマと回復」『女性ライフサイクル研究：女性のトラウマと回復』第9号
- 村川治彦 2011 「一人称から歩み直す『戦争体験』～体験心理学に基づく歴史・平和教育の構築に向けて」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み～南京を思い起こす 2011』立命館大学人間科学研究所
- 村本邦子 2011 「続・歴史のトラウマと和解修復の試み「南京を思い起こす 2011」の報告と課題」『歴史のトラウマの世代間連鎖と和解修復の試み：南京を思い起こす 2011』立命館大学人間科学研究所
- ギャトリ・スピヴァック 1998 「サルバタンは語るができるか」村上忠夫訳 みすず書房